

2020年11月22日(日)「魂を満たすもの」

《聖書協会共同訳》コヘレトの言葉 6:7-9

- 7 人の労苦はすべて口のためである。だが、それだけでは魂は満たされない。
- 8 愚かな者にまさる益が知恵ある者にあるのか。人生の歩み方を知る苦しむ人に、何の益があるか。
- 9 目に見えるほうが、欲望が行き過ぎるよりもよい。これもまた空であり、風を追うようなことである。

《新改訳 2017》伝道者の書 6:7-9

- 7 人の労苦はみな、自分の口のためである。しかし、その食欲は決して満たされない。
- 8 知恵のある者は、愚かな者より何がまさっているだろう。人の前でどう生きるかを知っている貧しい人も、何がまさっているだろうか。
- 9 目が見ることは、欲望のひとり歩きにまさる。これもまた空しく、風を追うようなものだ。

【序論】

「あなたは自分の人生に満足していますか?」。今日はこの単純な問いから始めてみたいと思います。信仰問答書に出てくるような立派な回答を一旦脇に置いて、ご自分の魂に訊いてみていただきたいのです。自分の心は満たされているだろうか。満たされているとしたら、何によって満たされているのだろうか。反対に、何か不満を感じているとしたら、それは何に起因しているのだろうか。自分が最大の価値を置いているものとは何だろうか。説教者自身もそのことを自らに問い、自分の心を探ってみました。私の中にある多くの願い、それらを達成していくために必要な力、その動機はどこから出ているものであるか。御言葉と向き合うとき、私たちには自分を見つめ直す時間が否応無しに訪れます。そのとき、自分の真の姿が見えてくるまで内省をやめないことが重要なのです。

【本論】

今日を含めてあと二回、「富」と関連する話題が続きます。今日の箇所は直接「富」について語っているわけではありませんが、8節に出てくる「**貧しい人**」(新改訳 2017)という言葉から、富と無関係ではないことが分かるでしょう。また、7節の「**労苦**」、9節の「**欲望**」などの用語も、労働とそこから得られる富、物質的豊かさを通してそこに意味と満足を見つけようとする試みを表しているようです。よって、今日の箇所は5:6からの文脈上にあると言ってよいでしょう。

本論 1. 魂を満たすもの

人の労苦はすべて口のためである。だが、それだけでは魂は満たされない。(6:7)

「口のため」という表現は、「食っていくため」と言い換えることができるでしょう。交際、教育、趣味などに先立って、生命維持のために何よりも必要なことです。食欲が満たされなくては、人はその先へ進んでいくことができません。本書では度々「食」に関する話題が出てきますが、感触として、そこにはコヘレトの二つの思いが乗せられているように思います。第一に、満たされてはまた空腹になり、空腹になってはまた満たし、そのサイクルを延々と繰り返す人間の肉体、そのために労苦を続けなくてはならない人生の空しさを笑うコヘレトがいます。第二に、食べて美味しさを味わい、幸福感を繰り返し感じることでできる幸いを「賜物」と呼ぶコヘレトもいます(3:13)。これら二つの価値観を隔てているのは、神の存在の有無です。食欲というものを、ただ人間を「動物」と見たところの必然的な欲求にすぎないものと見るか、あるいは人生に豊かさや楽しみを与えるために神が下さったものと見るか。同じ物事を「太陽の下」の価値観で見るか、「天の下」の価値観で見るか。

7節の後半部分は意味深長です。「それだけでは魂は満たされない」と訳されていますが、いくつかの翻訳を比較してみると面白い発見があります。

- ・ 「その食欲は決して満たされない」(新改訳 2017)
- ・ 「その食欲は決して満たされることはない」(フランシスコ会訳)
- ・ 「それでも食欲は満たされない」(新共同訳)
- ・ 「その食欲は満たされない」(口語訳)
- ・ 「And yet the soul is not satisfied」(NKJV)

多くの日本語訳は異口同音に「食欲」と訳していますが、NKJVでは「魂」(soul)と訳されており、聖書協会共同訳も「魂」を採用しました。原文を調べてみますと、ここで使われているのは有名な「נפש」/ネフェシュ」という単語で、一般的には「魂」「自己」「命」などの意味を持ちます。ただ、「食欲」という意味も含まれていますので、多くの日本語訳では「口」とのつながりでこちらを選んだのでしょう。しかし、私の見解としては、今回聖書協会共同訳で「魂」が選択されたことは重要であると感じています。ここでは単に「食べること」だけが問題にされているのではなく、生きることそのものが神との関係の下にあるかどうかが問われていると思われるからです。

人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きるということを、あなたに知らせるためであった。(申命 8:3)

本論 2. 満たされない魂

愚かな者にまさる益が知恵ある者にあるのか。人生の歩み方を知る苦しむ人に、何の益があるか。(6:8)

本節は翻訳の難解さを抱えた部分であり、大きく分けると二つの解釈があります。ここでは新共同訳と比較してみましょう。

賢者は愚者にまさる益を得ようか。人生の歩き方を知っていることが、貧しい人に何かの益となるようか。(新共同訳)

「知っている」という分詞をどこにかけるかで、意味が違ってきます。聖書協会共同訳では「苦しむ人」(貧しい人¹⁾) に向け、「貧しいけれど生き方を知っている人」というニュアンスにしています(やや肯定的)。一方、新共同訳では「人生の歩き方を知っていること」を独立させ、それが果たして「貧しい人」に何か益をもたらすのだろうかと疑問符を打っています(やや否定的)。では、「人生の歩き方を知っている」とは何を意味するか。直訳すると「生きている者の前を歩くことを知っている」となり、「歩く」とは「ふるまう」「処する」ことを比喩的に表していますから、「人に気に入られる術を知っている」「世渡り上手」といった意味になるでしょう。

結局のところ、コヘレトが言いたいことは一つです。知恵ある者も、愚かな者も、身のこなし方を知っている貧しい者も、「欲望」の前には誰も優位に立つことはできないということです。聖書では、ある箇所において知恵があると富を得ることができると言われています。しかし、コヘレトは知恵をもって金持ちになった人はどこまでも豊かさを追求したいという終わりなき欲望の虜となりうることを警告しています。知恵は確かに人を豊かにするのですが、欲望は常にその先を行くからです。

自分自身を見つめてみるときに、コヘレトが言っていることがまさに人間の本質を突いていることに気づかされます。人は何かが欲しくて、それを得るために努力をしますが、その目的が達成されると新たな渇きを覚えるのです。もっと良いものが欲しい、もっと上に行きたいと。この「終わりなき願望」はどこまでも続き、その追求の旅に終わりはない。これは食欲とも共通点を持っており、満たされてもまた空腹になる感覚とどこか似ています。追い求め、掴んだと思ったらまた逃げて行く。欲望に支配された人間とは、まさしく「風を追うような」人生を歩んでいることになるでしょう。

本論 3. 今与えられているものに満足して生きよ

¹ 「苦しむ人」「貧しい人」

原文では「אָפּוּר／アーニー」という言葉が使われていて、英語で最初に置かれている訳は「poor (貧しい人々)」、次に「afflicted (苦しんでいる人々)」が来る。

目に見えるほうが、欲望が行き過ぎるよりもよい。これもまた空であり、風を追うようなことである。(6:9)

初めて9節を読んだとき、何が言われているのかさっぱり分かりませんでした。しかし、これまでの話の流れを経て、コヘレトが言わんとしていることが理解できるようになりました。「欲望が行き過ぎる」とは、前言のように、満たされ得ない願望を追い求めて彷徨い続けることです。願望は進み進んで、非現実的な幻想を抱かせるかもしれません。そうすると、人は妄想ばかりを語り、「こうだったらいいのに」というフワフワとした地に足の着いていない生き方になっていくでしょう。一方、「目に見えるほう」とは、現実を目に向け、与えられたものに満足して生きる道です。持っているもの、限られた賜物を如何に楽しむか。これは、先二回の説教で語らせていただいたところの「賜物を用いる賜物」と一致しています。このような生き方が生まれてくる根拠は、自分の持っているものすべてが「神から来ている」という認識に立つところにあります。

8節では、「知恵ある者」も「愚かな者」も「人生の歩き方を知っている貧しい者」も、欲望の前には何の優位性もないということが言われていました。では、人に「優位性」を与えるのは何でしょうか。それは、神を知ることなのです。神を畏れ、神との交わりのうちに満足を見出すことです。

- ・ すべて世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、見栄を張った生活は、御父から出たものではなく、世から出たものだからです。(Iヨハネ2:16)
- ・ 私たちは、見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠に存続するからです。(IIコリント4:18)

私たちが見ているものが何であるかが問われています。この世は人間の欲望を駆り立てるもので満ちており、それに従って歩むと目標の見えない人生を彷徨うことになるでしょう。コヘレトが勧めているのは、この人生を終えたときに神と出会うその日を注視することです。本節のタルグム²の解釈が参考になりますのでご紹介いたします。

「人にとって、魂の苦しみある世界へ入っていくより良いことがある。それは、来るべき世^{きた}を楽しみ、義を行ない、大いなる審きの日に受ける(地上での)労苦に対する良い報いを見つめることである。」(意訳)

【結論】

²「タルグムはユダヤ教の会堂でヘブライ語の聖書を詠唱する時に、各文章または段落ごとにヘブライ語が分からない会衆のために彼らが理解できるアラム語で解釈することをいう。」(Wikipedia)

聖書をよく知っているユダヤ人は、「魂を満たすもの」を「律法を学ぶこと」と理解しています。私たちが見ているものが何であるか、今日の箇所は問いかけてきています。私にとっては、本腰を入れて御言葉を学んでいる時が最も魂が満たされる時であることを自覚しています。しかし、この世の魅力的なものに目が向き始めると、終わりなき欲望の虜になります。常に最後の審判を見据え、神を知る人生を歩み続けたいと思います。

【祈り】

いのちの泉なるイエス・キリストの父なる神様。私たちはいのちなき底なしの沼にはまり込む危険性を常に秘めた存在です。欲望は満たしても満たしてもまた渴くのです。しかし、主イエスは神との交わりあるところこそ魂の満たしがあることを教えてくださいました。私たちにもその泉を下さい。朽ちることなき永遠のいのちの水を、この魂で受け続けることができますように。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
エデンを去った人類の、満たされ得ざる心を知り給う、父なる神の愛、
天より降りしパン、永遠のいのちの泉として、人の心に宿り給う、主イエス・キリストの恵み、
神への飢え渴きに気づかせ、まことの満たしを求めさせ給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。